九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# ニーチェの仏教観 : ベルリン自由大学《Seminar für Evangelische Theologie》のための講演

滝沢, 克己
九州大学文学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/27409

出版情報：哲学論文集. 3, pp.1-12, 1967-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

# ニーチェの仏教観

—ベルリン自由大学《Seminar für Evangelische Theologie》のための講演—

滝沢克己

目次

一、ニーチェの実存……1
二、病めるニーチェとイエス及び仏陀に対する彼の共感……3
三、ニーチェの仏教観と仏教的苦悩……5
四、ニーチェと仏教における罪の問題……7
五、結語……9
あとがき……9

## 一

「アンチ・クリスト」をよく読みますと、ヨーロッパのたいていの哲学者達と違って、ニーチェは真に実在する唯一の点――善悪をまったく超えているけれども、しかし彼自身から離れたどこか遠くにあるのではなくて、まったく彼の身近かにある、むしろ彼自身と完全に一つである、まさにそのようなものとしてこの世のすべての善の根源である唯一の点――に逢着した。あるいは少くとも、その一点をかなりはっきりと予感していたように思われます。

「怨恨（ルサンチマン）」という彼の言葉、通俗キリスト教に対する彼の批判、人間イエスと仏陀に対する彼の深い共感――これらはすべて右のことを証拠立てます。

ただ残念なことに、彼はその際、彼の美しい著述全体の本来的な根源――あのアルキメデスの一点――の存在と働きを、まだそれとして認識するには至りませんでした。ということは、しかしまた、彼が自分の感情、意志、判断、要するに彼自身の実存と、あの実在する一点とを、はっきりと区別することができなかったということです。いいかえると、そのことはとりもなおさず、もともとあの一点の漠たる反映にすぎない彼自身の実存を、まったくそれ自体で在り且つ輝く光そのものと同一視したということ、だから彼自身の実存を他のすべての実存の始源と目標、基礎ないし基準として立てたということにほかなりません。

しかし注意して下さい！――そうは申しましても私は、ニーチェが彼の哲学的反省において一方に一切の始めであり終りである神秘的な一点を、他方に彼自身の高められた実存を、同時に眼の前に置き、比較しつつ考察することによって一方を他方と同一視したなどと考えているのではありません。何故と申して、自己の実存は、確かにこれを自己の反省において眼の前に置くことができますが、あの実在する一点、その存在と働きは、決してこれをそのような仕方で眼の前に置くことができないからです。ですから、ニーチェが両者を区別することができず、二つのまったく異

なるものを同一視したと言われるとすれば、それは厳密には次のことを意味しなくてはなりません。すなわち、そこでは一切の善と悪とが単純に消滅すると同時に他面そこからそこへ向ってすべての善きものが産み出されてくる、―このような窮極始源の一点は、ニーチェの思惟の視野にまだほんとうにそれとしてはいってきてはいなかったということ、したがって彼の視点からは、たゞ彼自身の実存にまでもまだ至らない人間的実存の諸相以上のものは見えてくることができなかったということを意味しなければなりません。

## 二

もしも彼がかの一点をそれとしてほんとうに見たのであるならば、彼はかならず、同時にまた次のことに気がついたはずです。すなわち、そもそも人間的実存は唯一つの例外もなしに、だから彼自身の実存も含めて、その時、その所において、そのつどあの窮極の一点からの真に根本的な批判の下に置かれてあり、しかもまさにそのことによって不可避的に、新しい生命に到るべく要求されているという一事がそれです。そこでは誰も自己を誇ったり、自己を呪ったりすることはできません。そこでは、すべての人、一々の人が、その業の善悪、その思いの正邪、もろもろの所有の大小を問わず事実上完全に平等です。かかる平等な場面の上で初めて、人と人の間にそれらすべての区別や対立が起るのです。それはちょうど、瞬間から瞬間へと、つねに新しく現われる唯一かつ共通の盤面がなければ誰も将棋を指すことはできず、したがってそこでは、原理的な意味ではいかなる人も他人より高いとか正しいとか言うことは不可能であるのに似ています。そこに「初心忘るべからず」という誡めの実在的根拠もまたあるのです。

人間的実存と絶対に不可分ではあるが絶対に混同することを許されない、人生共通の基礎ないし動力に盲目だったかぎり、ニーチェはこのことを理解することができなかった。真の人間的実存はかならず、徹底的に批判的であると同時に無条件に柔和であり、完全に超脱的であると同時につねに新しく創造的であるということ、徹底的な愛と批判、完全な受動と能動というこの両面は真の人間的実存においてはけっして相互に切り離されえないということ、人

間は、何らの功績なしに、単純に彼に与えられた堅い基盤の上に置かれており、同時にまさにそのことによって否応なしに、あたかも遊戯する幼な児のごとく自由に、一つの共同の生をいとなむべく促がされているのだということ、—すべてこれらのことを理解することができなかったのです。

思うに、ニーチェが、世にいわゆる民主主義の低俗と空虚を嘲笑し、これに反対して闘ったのは確かに正しかったのです。そのために彼を貴族主義的として非難するのは間違いでありましょう。彼のばあい、問題はもっと深い処に潜んでいました。しかじまた、問題がもっと深い層にあったといっても、やはりそのような非難を招く何かが、彼自身の側にもあったことは否めません。というのは、ニーチェにおいては、人間的実存の創造的・批判的な側面が絶対に超脱的・無条件的な兄弟愛から切り離されて、ほとんど、「怨恨(ルサンチマン)」の臭いがするほどに孤立的・痙攣的な形をとっているからです。彼が通俗のキリスト教や観念論全体を超えているかぎり、彼はニヒリズムがヨーロッパの生活と思惟の必然的な帰結であることを理解しています。だからこそ彼は他の宗教家や哲学者たちを斥けたように乱暴には、聖書のイエスの無差別の愛や仏陀の完全な静けさを拒否しようとはいたしません。彼はそこに何か真なるもの、言うに言われぬ優しいもののあることを、鋭敏に感じとらないわけにはいかないのです。ただ独り在る時、おそらく彼は、そのような仏陀の静けさ、イエスの優しさに、熱い憧れをいだいたことでしょう。そういえば、一九二七年に自殺した日本の一作家(芥川龍之介)も、彼のアフォリズムの一つに書いています、「いかに狂気のごとく、ニーチェはイエスを羨んだことか！」。

人間イエスにおいて啓示された堅い基盤に盲目だったかぎり、残念ながらニーチェは、人間イエスの愛と苦しみがどこから来たかを、見てとることができなかった。えもいえぬ仏陀の安けさがなぜ人として不可能な夢、この世の生活からの逃避ではなく、むしろ反対に、人として本来自然な動きであり、苦悩に満ちた人間世界の只中へと心を決めて歩み入ることであり得たかを、理解することができませんでした。イエスと仏陀に対するかれ自身の深い共感と熱

い憧憬にもかかわらず、ニーチェはそのいずれにおいても、真実の救いの明らかな啓示を見いだし得ず、ただデカダンスの極めて繊細な一形式を見いだすほかはなかったのであります。

## 三

もしもニーチェが、ある点はたしかにかれ自身鋭くこれを把えもし言いあらわしもしたイエスその人を、ほんとうに理解したとしたならば、彼のパウロ批判、彼のキリスト教全体に対する態度も、まったく異なったものとなったでしょう。しかもそれは、彼の宗教批判の主旨を弱めるためではなくてむしろその批判をもっと徹底させるために、そうなるはずであったのです。

しかしキリスト教にかんしては後ほどゴルヴイッツア教授とトイニッセン博士が、根本的にかつ詳細に取り扱われるはずですので、私はただニーチェの仏教観について、かんたんに私見を述べることと致します。

彼の歴史学的説明、ないし心理学的・社会学的解釈にかんするかぎり、少くともその枠内では、かれの見方はほぼ正しいのではないかと、私には思われます。彼が仏教についてキリスト教と比較しつつ述べていること、例えば、仏教はキリスト教と違って温暖な風土のもとで成熟した人々の宗教、善良で柔和で、極度に精神的な種族のための宗教であるということなどは、確かに興味深い考察でありましょう。しかしニーチェが「善悪の彼岸」にあるとは如何なることかを自己自身に即してほんとうに理解したのであるならば——真に善悪を超えた座に彼自身を置いたのは彼自身ではないこと、だからそこには彼みずからけっしてそれを越えることのできない厳しい限界があること、したがって、彼自身、否応なしに、一つの聖なる制約の下に置かれていて、かれが人間として自由に生きるために、それに抵抗するなどということはできもないしまた必要でもないということ——彼がもしもこれらすべてのことを認識したとしたならば、彼の仏教についての思索は、その歴史学的・社会学的、生理学的・心理学的考察を超えて、さらに深く

仏教の本質の中へと透徹し得たでありましょう。

と申しますのは、彼が述べていることはすべて、たとえそれが正しく且つ興味深くあるとしても、所詮はただ、仏教成立の特殊的ないしは風土的な前提、たかだか仏教的実存の一段階、ないしは或る特別にすぐれた状態にかかわるものにすぎないからです。ところが、私の理解するかぎり、仏教的実存への歩みは次のような恐るべき事実に目を閉じることが、もはやどうもがいても不可能となるとき、はじめてほんとうに始まるのです。すなわち、ひとがそれを誇りかつそれでもって安心したいと思うような特別な長所・美点はすべて——古いものも新しいものも、身体的なものも精神的なものも、個人的なものも社会的なものも、結局のところすべて——無常なものである、信仰といおうが行為といおうが、我々人間の意志やはたらきによってこの空虚な淵から抜け出る道は絶対にない、ということがそれであります。

それにもかかわらず、我々人間はいつも、この堅い事実を忘れて、何かの長所・美点において永遠に堅固な人生の支えに逢着したかのように、繰り返し夢見ます。そこから、その長所にかんする病的な敏感さ、狂気の如き執念が出てきます。こういうことはけっして、たんに何か特別な長所や美点にかんしてだけではありません、よく見ますと、内的たると外的たるとを問わず、この世のもので、我々を同じ仕方で眩惑しないものは何一つない。ひとごとでなく、我々みんながひっかかっているこの魔術から、そしてその結果我々にやってくる苦しみから、ほんとうに脱却すること、そのことが仏教にとって第一の課題なのです。

あるいは言えるかもしれません、ニーチェもまたここまでは、仏教の本質を正しく見ていたと。なぜなら、かれもまた申します、——

『仏陀の教えでは、自己関心は義務である。そこではただ一つの事だけが要求される』

『汝自身がいかにして煩悩から脱却するか、その方法だけが仏教の精神衛生全体を規制し限定している』。

しかし残念なことにニーチェはもともと、彼自身の高揚せる実存以外の何ものも知らない。彼自身の実存に満足して、人間の煩悩がそもそもどこから出てくるか、どこでそれは完全に消えるのか、彼は最後まで探求しようと致しません。仏教徒とともに、最後まで進み行くことをせずに、彼は仏教を、ただ消極的に「行為を捨て」ようとする一種のデカダンスあるいはニヒリズムとして片付けてしまいます。そうして我々が前述したように、「呪われた」キリスト教との比較において、仏教の「諸前提」及び「長所」にかんする周辺的な考察だけを進めるのです。

## 四

ニーチェが罪の問題において仏教をもキリスト教をも正しく評価することができなかったという事実もまた、上に述べたこととたしかに深く関係しています。彼はその遺稿の中で申します、「こゝ（仏教）では罪は憎まれておらず、こゝでは『罪』の概念が欠如している」と。

もしも「罪」ということがただ、宗教のそれをふくめて、歴史的・社会的に規定され、神聖なものとして宣言された掟を犯すことだけを意味するのならば、たしかにそう言われ得ましょう。仏教徒は、既に述べたように、比の世の何物も神聖だとはしないのです。しかし彼は、そうすることで満足しているのではありません。哲学的・宗教的に神聖なものを否定することは、彼にとってむしろ、無常性という恐るべき事実によって強制された相対化の行為であって、彼がそれを誇ることができるような高揚ではけっしてありません。それどころか彼は、事態がそうであってはならないということ、かかる状態を克服しなければならないということ、そのためには彼にとって何か神聖なもの・永遠なものが必要であるということを、心の底から痛切に感じるのです。それにもかかわらず、彼には絶対に必要なこのものが欠けている。その恐ろしい状態を彼は克服することができない。そうしてまさにこの点に彼の苦悩は存するのです。

ですから、仏教徒の苦悩というのはけっして苦悩の諸現象をただ単に客観的に確定することではない。そうではなく

てそれは、この世界に、人生そのものに、何か根本的にしっくりしないもの、(etwas, was gründlich nicht stimmt.)があるという、最も内的な、全身全霊に浸みとおってくる感じなのです。いったい何がしっくりしないのか?—それを彼は知らない。しかしそんなふうにすべてが流れ去るままであってはならない。彼はどこかでどのようにかして、それをとどめなければならない。しかしそれができない。自分自身の意志的な行為の結果ではないのに、それなのに深く恥じないわけにはいかない奇怪な無力さ——かかる生れながらの無力さを、仏教徒は「業(Karma)」と呼びます。

そうだとすれば人は仏教徒について、彼には罪の意識が欠如している、などと言うことができるでしょうか。何と調和しないのかを容易に示すことができるような、特定の罪の意識、そのような罪の意識は、たかだか罪の意識の一種、しかも第二義的で皮相的な類のものにすぎないのではないでしょうか。キリスト教徒が「原罪」というばあいも、少くともいちおうは何か似たものが意味されているといってよいのではないでしょうか。

苦悩する仏教徒はそれにもかかわらず、人間の無気味にも暗澹るこの状態からの出口があるのかないのか、あるとすればどこにか、そもそも人間の何が、なぜ、またどのように、しっくりといかないのか、最後の最後まで考えぬこうとつとめます。そうして彼が遂には逢着し、彼自身の暗い、無気味な苦悩を、澄んで優しい慈悲に変えるところの唯一の真理を、自己自身の生活と思惟においてできるだけ明らかに表現、いな体現すること、そのことが真の仏教徒の唯一の努力であるように、私には思われるのであります。

仏教がこの道をどこまで進んでいるか、それは私たちが今後詳しく研究しなければならない問題ではありましょう。しかし、私が私の恩師や親しい友人において見るかぎりでは、仏教がニーチェの意味での「ニヒリズム」から遠く隔たり、まして西洋哲学にいわゆる「汎神論」や「神秘主義」とはまるでちがって、人間的実存の極めて真実で且つ人格的な形態であることは、まったく疑いの余地がありません。キリスト教との対話に際しても、ただ真理への問いだけが、最初で最後の問いでなければなりません。

## 五

ニーチェは『アンチ・クリスト』以外においてもしばしば仏教について彼の見解を発表しています。『悲劇の誕生』、『反時代的考察』、『曙光』、『悦ばしき学問』、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜学』、『この人を見よ』など、彼の主な著作のなか、その各々のいくつかの箇所で仏教に触れています。『八十年の遺稿』の中では二度ほど「ヨーロッパ的仏教」あるいは「仏教のヨーロッパ的形式」をさえ期待しています。しかし残念ながら事柄そのものにかんするかぎり、それらのどれも、『アンチ・クリスト』に述べてある以上には出ていません。

時間もまいりましたので、仏教そのものの積極的内容に立ち入ることは、約束された次の機会にゆずることに致します。しかし、『アンチ・クリスト』その他におけるニーチェの試みを今日新しくかついっそう根本的にやりとおすことは遠い東方の願いであるばかりではなく、西欧の生活と思惟にとってもまた多くの利益をもたらす仕事だということ、―それだけは以上のかんたんな考察によっても、いくぶんかこれを明らかにすることができたかと存じます。(おわり)

## あとがき

昭和四〇年(一九六五年)四月から満一年、私はドイツ福音教会連合の招きを受けて、「哲学上、宗教上の思想交流のため」、ドイツに滞在した。昭和八―一〇年(一九三三―三五年)A・v・フンボルト協会給費生としての留学以来、ちょうど三〇年ぶりのことである。その間ずっと私の脳裡を去らなかった一つの根本的な問題について、もう一度旧師カール・バルト先生のお話を伺うことが、私としての第一の目的でもあり、楽しみでもあったが、先生は前年以来の大病からようやく回復されつつあるとはいえ、長い時間お妨げすることはとうてい不可能であった。短い時間で立ち入ったお話をするためには、こちらに十分な準備がなくてはならない。そのためにはまず、西ベルリンのゴルヴィツァー教授のもとで、問題を煮つめ、ドイツ語を話すこともとに戻ったところで、バーゼルのバルト先生をお訪ねするに如くはない。ゴルヴィツァー教授は、私よりも数年先輩、バルト先生が後継者としてバーゼル大学に招き、同大神学部の教授会も通りながら、教育委員会の反対―教授のソヴェートにかんする著書その他の故という―にあって、実現せず、その後、ベルリン自由大学哲学部に新設されたキリスト教神学講座の担任者として同大学に招聘

された碩学。このような経歴を俟つまでもなく、それまでに私の読んだ二三の著書・論文は、同教授が噂さのとおり、肝要な点で、バルト先生の思想というよりも、ほとんどバルト先生その人を、最も忠実に、しかも自由に承けついだ人であることを確信せしめた。おおよそ以上が、このたびの留学期間中最初半年の住居を、ベルリンに選んだ理由である。

五月の初め、あらかじめ打ち合せた時刻に、私は、同じショーペンハウエル街の上手七、八百メートルの所にある教授のお宅を訪ねた。よもやまの話ののち、いっしょに Ihnestrasse の教授のゼミナール——赤瓦の二階建、かなり大きな独立の家で、入口には《Seminar für Evangelische Theologie Freie Uuiversit't Berlin》と書いてある——に行くと、そこにはすでに、噂さに聞いたハイデッガー門下の俊秀、まだ三十才そこそこのトイニッセン講師が待ち受けていた。講師はゴルヴィツァー教授の信頼すこぶる厚く、この学期は矢しい計画を実行に移して、ニーチェの『アンティ・クリスト』を主なテクストとして、『ニーチェとキリスト教』にかんする共同の演習を行うはずであった。

約一時間半二人の相談によって、五月から七月末日まで十数週間の演習の詳しいプログラムが作られる。各時間のテーマは、それぞれ名指しで、有志の学生に割りあてられるが、そのようにして発表をしない者も正規の参加者は、かならずそのいずれかについて、よく調べかつ考えた報告を提出しなくてはならない。といっても、それからしばらくして、トイニッセン夫妻の車に同乗して訪れた大きな教室は、二百人を超える男女の学生たちで溢れていた。たちまち、私は三〇年前のバルト先生の教室や演習室を想い起した。あとでわかったことだが、この大勢の学生たちの一人々々を、事柄そのもののなかへと引き入れ、それぞれに探究と思索の火を燃え立たせる力量は、日本のみならずかの地においても、そう容易にはめぐりあうしあわせを得がたいものであろう。

五月下旬のある日、イーネ街のゼミナールを訪れると、居合わせた教授は、『アンティ・クリスト』のなかのニーチェの仏教観について、私の思うところを話してくれないかという。六月の初旬には、ジュネーブの近所の或る研究会に出席するはずだった私は、かりに私のドイツ語の不十分なことはしんぼうして頂くとしても、私がもともと、京大の哲学教授で禅の達人だった故西田幾多郎先生、先生のごく早い頃の学生で、すでに在学中から禅に入り、卒業後こんにちまでその一筋に生きてこられた久松真一博士、現在龍谷大学学長をしている畏友星野元豊氏をとおして、親しく教えを受けたという以外、仏教の歴史や文獻についてほとんど何一つ知らないことをありのままに述べて固辞したが、ゴルヴィツァー教授は、「それでもわれわれよりはよく知っているにちがいない」ということで、どうしても承知なさらない。はてはみずから、シュレヒタ版ニーチェ全集のなかの、仏教に言い及んでいるあらゆる頁の表まで作って、ぜひ意見を聞かせて欲しいという。他方、私自身、まったく無学の素人ながら、『アンティ・クリスト』のなかのニーチェの仏教観はそれなりに非常に興味深く、かれのキリスト教批判と照らし合せて、たしかにこうと思いあ

たる節もないではなかったので、とうとう恥を覚悟でお引き受けすることとした。

それから数日のあいだ、ゼミナールに通いつめて、教授の提示した数十箇所のテクストを読み、ともかくも想を纏めて書きおろしたうえ、短い注を加えながら学生たちのために約四十分間行なったのがここに訳出した拙稿である。さいわいに、ドイツ語もよく通じ、講演の後、約三〇分、教授を始め、何人かの学生たちとの活潑な質疑応答があった。なかには演習の終了後にまで質問を重ねる熱心な学生もあった。とはいえ、もとより、本稿は、諸兄の現に見られるとおり、「学術論文」の名に値する労作ではない。ただ帰国以来、身辺多忙をきわめて、別に適当な論文を、与えられた期限と枚数にしたがって書く余裕がないままに、滞独報告の一端を兼ねて、一応の責を果させて頂くこととした。私自身の本来の課題であった神学的・哲学的問題について、カール・バルト先生、ゴルヴィツァー教授始め、今日のドイツの学者たちが、どういう状況にあるかは、帰国直後、本哲学会昨年春の例会でお話ししたほか、前々からの約束で、久松真一博士主宰の《F・A・S》誌（事務所、京都市東山区林下町樹昌院内）の次号以下二回にわたって、拙稿が掲載されるはずである。しかし、こんにちのドイツ、おそらくは一般にヨーロッパの思想界が、近代以来（ハイデッカーによると二千年来）染みついたその思惟の仕方を一八〇度転回せしめる大いなる震動を経験しつつあることは、すでに第一流の老神学者と若い哲学者が、ほかならぬニーチェの『アンティ・クリスト』をテクストとして共同の演習を行なうという一事のなかにも、その一端を看て取ることができるであろう。その前年の冬学期には、ゴルヴィツァー教授と、これもハイデッガーの古い弟子ワイシェーデル教授とのあいだに、毎週交互にそれぞれの主張とそれに対する批評を積み重ねる、半公開の講義が試みられ、その成果は、私のベルリン滞在中、《Glauben und Denken》（『信仰と思惟』）という題の書物となって出版せられた。それは一読して、ヨーロッパにおける哲学と神学のあいだの溝がいまなおいかに深いかを思わせる態のものではあるが、双方の誠意と、どこまでも真剣で自由な対話の継続は、ウイーンのV・E・フランクル始め、これもまた到る処に見られる精神医学者や心理学者たちとの緊密な協力と相俟って、やがてかならずや、キリスト教の誕生以来ヨーロッパを悩ましてきた難問に、一つの新しい解決の道を見いだすことであろう。そうしてこのことは他方、西洋と東洋の相互理解ということとも、けっして無関係ではないのである。

なお、使用した『アンティ・クリスト』のテクストは、《Siebensternen-Taschenbuch》（「七星新書」）所収のもの、もともと短い論文のうえ、全体を読み通すことなしにその部分だけを読んでみてもあまり意味のないことなので、私の立言の根拠として一々の箇所を指示する煩を避けた。『アンティ・クリスト』以外の仏教にかんする箇所についてもまた、Sollen-ta 版全集の索引にこれを譲ることとしたい。

最後に、本稿の和訳については、倫理学研究室の博士課程学生岩切政和君を煩わした。記して厚く感謝の意を表する。（一九六七、七、七）

（本学文学部教授・倫理学）